

## インド仏教僧院における学術的傾向を追う

—十三世紀の学僧を中心に—

研究員 倉西 憲一

ある特定の時代、ある特定の僧院における学僧たちの学術活動について知る方法の一つとして、著作中の引用文献の扱われ方やその内訳および頻度を分析することが挙げられよう。今回の講座では、特に十三世紀の学僧の一人ラトナラクシタのマスターピースであり、『サンヴァアローダヤタントラ』の註釈書として著作された『パドミニー』に焦点を当て、そこに引用される文献のいくつを挙げ、当時の学僧たちの学術活動の一端を紹介した。

『パドミニー』はタントラの註釈書として著されたが、所々に当時のインド、ネパール、さらにはチベットの仏教界が問題にしてきた重要なトピックを題材にして議論が展開されている。特に、これら議論中に顕密両者に渡って多くの文献が引用されている。また、それらの引用の中にはサンスクリット原典の現存しない文献もあり、資料的価値は高い。例えば、顕教文献ではアーリヤデーヴァの『四百論』からの引用があり、この偈（第12章第18偈）のサンスクリット原文は初出である。

学僧たちの学術活動の産物である彼らの論書において、そこに引用される文献はどのような役割を持っていたのであろうか？ ヴィクラマシーラ僧院などの研究機関では学僧

たちが異なる学説をめぐる論争しており、彼らの自説あるいは自ら賛同する学説を宣揚するために著述活動をおこなっていた。そして、その著作に引用される文献はいずれも展開される議論において教証あるいは反証として重要な役割を果たしている。引用文には必ずしも引用元文献の情報が表示されているわけではない。当時の著名な經典や論書は記憶され基本的知識として扱われていたのである。

文献が引用される際、特に後代の学僧たちは同じ議論を展開する従前の論書を参照して、その議論展開に利用されている引用文献をしばしばそのまま転用していた。いわゆる孫引きである。こうした孫引きは、おそらく実際の文献を合わせて参照せずに引用していたようである。それは、孫引きとその元となった論書が実際の文献と異なる読み、あるいは誤った読みを共有していることから推測できるのである。後代になればなるほど、実際の文献を参照しようにも、散逸してしまっていて、参照できなかったというやむを得ない事情も考えられよう。

いずれにしても、学僧たちの著作において、引用文献がどのように扱われていたのか、さらにはそれらの役割を見極めることが、著者の学術活動、さらには同時代の学僧たちの学術交流を知る大きな手がかりになるのである。